サントリーホール IIIIIIIIIIIIIIIIIIIIIIIIはしごIIIIIIIIIIIIIIIIIIIIIIIIサントリー美術館

私たちは「音楽と浮世絵好き」つながりで、10/8 体育の日にスポーツ以外で足腰を使ってサントリーホール（六本木 1 丁目）～サントリー美術館（六本木・東京ミッドタウン）へ行ってきました。

まずはサントリーホールにて 30 分ガイド付きで展覧会鑑賞―20 分ミニコンサート鑑賞―約 1 時間講演会聴講（ドイツ語・日本語通訳付）―時間短縮地下鉄で―サントリー美術館へ行きました。

ウイーン楽友協会創立 200 周年記念『音楽のある展覧会』―16 世紀、天正の時代から育まれた日本とヨーロッパの音楽交流の軌跡をたどる展覧会（2012.10.6～12 サントリーホールブルーローズ）

まず展示品は 16 世紀・17 世紀の書籍と絵から始まります。日本ではキリスト教の布教が禁じられ、プロテスタントのオランダ人だけが出島にとどまることを許されました。そのオランダ人から聞いた話を元に描かれた日本の建物や楽器は少々形が異なっていましたが、時代を経るにしたがって日本への理解度も深まり、19 世紀までには正確な描写が成されるようになりました。日本の代表的な楽器は琴・笛・三味線でしたが、浮世絵に描かれているように太鼓とトランペットなどを演奏する軍楽隊が「日本の音楽隊」のイメージだったようです。18 世紀にはモーツァルトがオペラ『魔笛』の冒頭に登場するタミーノに「日本の狩衣」を着せるなど、日本に対するあこがれがあったようです。1873 年ウイーン万博の「日本庭園」を訪れた皇妃エリザベートが描かれた絵もありました。

ウイーンではイエズス会のフランシスコ・ザビエルに対する信仰が厚く、彼を讃える資料が多数あり、皇帝レオポルト 1 世作曲『聖フランシスコ・ザビエル頌家歌』の自筆総譜もありました。

ウイーン楽友協会の活動目的は「コンサート開催・教授・収集」で、設立当初から世界の音楽と楽器に目を向けることを前提としていました。そのため小アジア・トルコ～ペルシャ～インド～中国～日本へとその活動を広げていきました。ベートーヴェンやシューベルトが生存中に鎖国中の日本の資料が図書館で読めました。初めて日本人がウイーン楽友協会の資料室を訪れたのは 1887 年のことでした。

1887 年に西洋音楽の教育機関として東京音楽学校（現：東京藝術大学）が設立されたとき、ウイーン楽友協会音楽院長：ヨゼフ・ヘルメスベルガー（息子）に教授派遣をお願いし、オルガニスト・ピアニスト・ヴァイオリニストだったルドルフ・ディットリヒが派遣されました。当時は日本という国は遥か遠くの国で、本国では彼はもう二度と故国へ帰れまいと思われたそうです。そして彼の妻は日本で亡くなったそうですが、ディットリヒが帰国したとき「日本で彼の妻の葬儀がキリスト教で行われた」と知り院長は安心されたそうです。ディットリヒには妻亡き後に日本人妻と男の子がいましたが、帰国は彼一人でした。その子孫の息子が「曾祖父のことを知りたい」と後に楽友協会を訪ねたそうです。

東京音楽学校でディットリヒに学んだ幸田延（幸田露伴の妹）は、ウイーン楽友協会音楽院の最初の女子学生としてヴァイオリンと作曲を修め、日本初のクラシック作曲作品を残しました。留学したときドイツ語にまだ慣れていなかった彼女は音楽史の講義を「1 年パスさせてください。でも 1 年後には受けることになるでしょう」という自信と覚悟を持って勉学に励みました。ジャコモ・プッチーニは彼女を通じて『蝶々夫人』作曲に必要な伝統的日本音楽の情報を得ました。

ウイーン駐在日本帝国公使戸田伯爵極子夫人が奏でる琴「六段の調べ」はピアノ譜に直され演奏されましたが、ピアノ譜と琴曲の違いに気付いたヨハネス・ブラームスは極子夫人の演奏を直に聴きたいと望み、実際に「六段の調べ」を聴きました。その違いを書き込んだ楽譜が展示されていました。

お伽草子―この国は物語にあふれている（2012.9.19～11.4 サントリー美術館）

助けた亀が娘に変身して竜宮城へ案内する浦島太郎の物語。僧侶や猿や人間に化けた鼠（鼠草子）が惚れた娘を手に入れようとするが、それを助けた若者と娘がめでたく結ばれる話。お伽草子中に源氏物語の歌が出てくるものには、政治の実権から外されて藝術に時間を費やした公家の教養が現れている。

物くさ太郎―グータラ太郎が都会へ出て働き者になって清水寺の前で女性を待ち受けて、そこから妻を選ぶ話。実は時代を生き抜くバイタリティーを描いた作品。現代にも通じますね。

約 420 種類の草紙のうち 1 割が清水寺参拝を促す絵図。身分に関係ない清水寺信仰が反映されている。

ヘルベルト・フォン・カラヤン氏のアドヴァイスを受け佐野正一氏を中心に設計されたヨーロッパ的音の快適空間：サントリーホール。ウイスキーの樽材「ホワイト・オーク」の再生利用の床・光る壁・桐の天井・和紙を通した光と影のコントラスト―隈研吾氏のこだわり空間：サントリー美術館。いずれも品よく心豊かに過ごせました。スタッフも優しく品が良くて人間にも癒されたニャー。(2012.10.10 記)